



市民オーケストラを指導するマリオ・ブルネロ(田園ホールにて)

世界一の感動を 岩手の若い人々に 紀尾井シンフォニエッタ東京 岩手公演

7月 7・8日 紀尾井ホール 東京第55回定期演奏会(初日・2日目)
9日 遠野市民センター 大ホール
釜石市民文化会館 大ホール
10日 矢巾町文化会館 田園ホール

4日間で「5公演」+「特別レッスン」 +「公開練習」を敢行

ワールドカップ・サッカーでイタリアが優勝した7月10日(日本時間) イタリア人の指揮者でチェリストのマリオ・ブルネロと紀尾井シンフォニエッタ東京は、紀尾井ホールでの第55回定期演奏会の2回公演から続く岩手県内3公演の「4日間・5連戦」の最終日を迎えた。

連日の公演にもかかわらず、朝3時からの試合をテレビ観戦し、最後までもつれ込んだPK戦の勝利で歓喜の声を上げたマリオ・ブルネロは、その興奮の冷めやらないまま釜石のホテルのレストランの朝食に現れた。紀尾井シンフォニエッタ東京メンバーの「おめでとう」の声に、マリオ・ブルネロは満面の笑みとガッツポーズで応えた。

この後、一行は今回のツアーの最後の演奏会場、矢巾町の田園ホールに向かった。

「4日間・5連戦」自体が演奏家たちにとっても過酷なことだ。それに加えて、遠野市、釜石市、矢巾町の岩手県3都市では、地元小中学生、高校生、市民に対する「特別レッスン(クリニック)」や「公開練習(公開ゲネ

プロ)」を分刻みでこなしながらのツアーは想像を絶する。どうやら「体力」と「集中力」を必要とするのはサッカーだけではなかったようだ。

トップクラスの演奏家が 生徒たちを直接指導

特別レッスン(クリニック)では、紀尾井シンフォニエッタ東京のメンバーが楽器ごとに分かれて、指導を行った。普段はプロの指導を受ける機会がほとんどない生徒・学生にとって、トップクラスの演奏家の指導は初めての経験といってもよい。短い時間ではあるが、指導には熱が入る。中には、学生が持参した楽器に不具合があるケースもあり、メンバー自らベンチなどの工具を持って修理から始めることもあった。基本の基本を丁寧に教えるメンバー、音楽について語るメンバー、厳しい面持ちでてきばきと指導するメンバー、スタイルはそれぞれだが、その真剣さは同じ。教えられる生徒や学生もどんどのめりこんでいく。

「公開練習」は、本番前の総仕上げの練習。特に地方公演では限られた時間の中で最後の仕上げをするために集



ゲネプロを熱心に見学する生徒たち(釜石文化会館にて)



クラリネットを指導する鈴木豊人(盛岡南高校にて)



公開練習でティンパニの周りに集まる生徒たち(遠野市民センターにて)

中力が求められる。今回は、そのゲネプロに際して、生徒・学生をステージに上げて演奏者の間近で聞かせた。身を乗り出して、楽器をのぞき込む生徒や学生の姿が印象的だった。

演奏曲目は、紀尾井ホールで演奏されたシューマン『チェロ協奏曲』とプロコフィエフ『古典交響曲』にチャイコフスキーの『弦楽セレナーデ』を加えた3曲。マリオ・ブルネロと紀尾井シンフォニエッタ東京の熱演は、3都市それぞれで大きな拍手に包まれ、大好評だった。

「オーケストラは 紀尾井シンフォニエッタ東京が世界一」

2002年にNPO法人化した紀尾井シンフォニエッタ東京は昨年の山形公演に引き続き、今年は岩手公演を敢行した。室内楽ホールとしての評価が定着した紀尾井ホールを拠点とし、発足以来11年経った紀尾井シンフォニエッタ東京は、新日鉄文化財団の設立テーマ「発掘・創造・育成・交流」を具体化するために、昨年のドレスデン音楽祭における公演のような国際的活動と並行して、地方公演や音楽教育などの社会貢献を推進している。

このような音楽分野における地域・社会貢献活動は、ものづくり教育、環境教育、スポーツなどのさまざまな分野における新日鉄の社会貢献活動と考え方を同じくしている。その第1は、その活動自体が世界のトップレベ

ルであるということ。第2に地域とともに歩む姿勢。第3に若い世代を育てていくことを重視していること。第4に長く継続していく姿勢だ。

発足以来11年という年月は、100年単位の歴史を持つヨーロッパのオーケストラに比べればまだまだ短く、これから「勝負」だといえる。しかし、紀尾井シンフォニエッタ東京は、この短期間に得てきた高い評価を、国内外の幅広い方々とともに、さらに高めていく挑戦を始めている。

すべての日程を終えた7月10日の晩、地元の方々がパーティーを催してくれた。

マリオ・ブルネロは、「応援してくれたすべての日本の方々のフレンドシップに感謝します。サッカーではイタリアが世界一になりましたが、オーケストラは紀尾井シンフォニエッタ東京が世界一です」とその感動を表し、メンバーとの再会を約束した。

それに応えてチェロの丸山泰雄は「マリオ・ブルネロを迎え、地方公演を行ったことで、これまでに出したことの無い音を出すことができびっくりしました。次回を楽しみにしたいと思います。皆さんありがとうございました」と締めくくった。



すべての日程を終えて。紀尾井シンフォニエッタ東京のメンバーとマリオ・ブルネロ

参加した皆さんの声

遠野中学校のブラスバンドでフルートを担当する菊池千帆さん
「めったに聴くことのできないプロの演奏に感動しました。音がひとつにまとまって聞こえて本当にすごかったです」

遠野中学校のブラスバンドでホルンを担当する小岩まどかさん
「一人ひとりがしっかりと役割を果たしながら、一緒になって曲を作っているのが印象的でした」

遠野中学校 瀬川史絵先生
「必ずしも音楽的な環境に恵まれていない地方を訪れ、めったにないチャンスを提供してくれたことに感謝します。ブラスバンドを指導していますが、私はピアノが専門なので、オーケストレーションについて目の前で学ぶことができ感動しました。ぜひこれからもこういう機会を提供してほしいと思います」



左より遠野中学校教諭 瀬川史絵先生
菊池千帆さん 小岩まどかさん

釜石南高等学校3年 佐々木泰子さん
「プロの演奏を聴く機会は少ないのですが、ゲネプロに立ち会える機会はもっと少ないので、とてもためになりました。皆さんの聴かせようとする思いが伝わりすごかったです」



釜石南高校3年 佐々木泰子さん

釜石北高等学校校長 土川春生先生

「このような高いレベルの演奏を身近に聴けてすばしかった。生徒たちは皆生まれてはじめての経験をしました。一流の良い音楽をともに聴くことができ、釜石の子どもたちにとって大きな財産になったと思います。これは大人から子どもたちへのすばらしいプレゼントです」



釜石北高校校長 土川春生先生

盛岡白百合学園小学校 佐藤由美先生

「今回はブルネロさんやメンバーの方々から多くの刺激を受け、感激し、感動しました。演奏会並びにご指導の機会を得たことで、地方の芸術文化の土壌を耕し、励ますという養分を吸収できたような気がします」

盛岡白百合学園小学校の皆さん

「色々な弾き方の工夫を教えていただき一段と上手になれたように感じます」
「セカンドバイオリンのことを教えていただき勉強になりました」
「またいつか会った時にはブルネロ先生のようにうまくなっているようにがんばります」
「いろいろなポイントを教えてくださったので、意味を意識して弾いています」
「プロの気力が良くわかりました」
「みなさんのコンサートは心に残りジーンとするすばらしい演奏でした」
「一人ひとりがやらなければいけない大切さ、一つひとつの音の質の大切さを学びました」
「がくふから おどりうたうよ おんぷたち」
「たくさんアドバイスをいただき、自分でも『変わるんだな』と思いました」
「お父さんは『一生聴けない演奏かもしれないよ』と言っていました。またもう一度聞いてみたいと思います」



広畑製鉄所 小さなたたら炉が 大きな夢への 出発点に

砂鉄・木炭の投入風景

新日鉄が主催または協力する「たたら製鉄」の取り組みが、全国に広がっている。「ものづくり教育」における社会貢献の一環で、2002年から取り組んでいる八幡製鉄所をはじめ、昨年は大阪府茨木市立南中学校や東京都北の丸公園内にある科学技術館を会場に実施した。

この夏、広畑製鉄所も「たたらプロジェクト」を開催した。その模様を紹介する。

“鉄のふるさと”と 広畑製鉄所との縁

広畑製鉄所の西北、約90km離れた兵庫県宍粟市(しろうし)千種町は、播磨風土記にもあるように、約1,500年前からたたら製鉄法で鉄を作ってきた“鉄のふるさと”だ。中世以降は特に備前の刀匠たちに珍重されて数々の名刀に姿を変え、また、高炉法が出現する明治の初期まで生産・生活用具の素材として活用された。千種町の天児屋鉄山跡には、現在「たたら里学習館」が建てられ、400m周囲の遺構と共に、先人たちの鉄づくりの模様を伝えている。

このように広畑製鉄所の近くにたたら製鉄法の“老舗”があり、“たたら”を身近に見聞きしてきたことも契機となって、今年5月、製鉄所内に「たたらプロジェクト」が誕生。総務部部長の猿渡康隆がリーダーとなってこのプロジェクトは始動した。

発起人となった広畑製鉄所長の勝山憲夫は次のように語る。「鉄のふるさと」に近い広畑製鉄所が古代製鉄法に取り組むことは、ものづくりの精神を社員が培うだけでなく、地域の皆さんにもその心を共有していただく機会となります」

たたら製鉄法が教える 先人たちの技と勘

広畑製鉄所は、たたら製鉄法をアピールできる場として、恒例の広畑製鉄所主催「緑の町スポーツ大会」を選択した。

「大勢の地域の皆さまに、鉄づくりの面白さや不思議さを見て鉄に親しんでいただき、“鉄の魅力”を発信したい。そこで、すでにたたら製鉄法を社員教育やものづくり教育の一環として取り組む八幡製鉄所の協力や、原料面での君津製鉄所の協力によって、広畑製鉄所内で関係者を集め、特訓することにしました」(猿渡)。

「村下(むらげ)」を務める広畑技術研究部主幹研究員の大貫一雄に関係者が結集し、7月下旬、広畑技術研究部の建屋で試験操業を行った。

「ノウハウを記した文献はあるのですが、実際の操業は教科書通りにはいきません。現代の鉄づくりに必須のセンサーもない時代に、良質の“ケラ”を作った先人たちの技と勘に敬服します」(大貫)。

一方、広畑ならではの取り組みとして、「地元の砂鉄でたたらを」と、前述の千種町天児屋鉄山跡周辺に産出する砂鉄を磁石で採集する地道な作業が8月中旬に行われた。



見守る大勢の地域の人たち



砂鉄採集風景



たたらプロジェクトメンバー



ケラ取り出し



ケラに目を輝かす大黒さん(左)と瀬尾さん(中央)



熱心にメモを取っていた山本くん

そして迎えた本番の8月20日、広畑スポーツセンター中庭で、朝から耐火レンガで特設の炉づくりに着手。次いで砂鉄14kgと木炭80kgを高さ約1mの炉に交互に投入し、1,300度前後の温度で送風し続ける作業を開始した。設備部主任の鞍津輪馨、大墨弘幸たちは、「普段の職場での仕事とは違った緊張感があります」と汗だくで炉の周囲を行ったり来たりしていた。

地域の“人材育成”へ たたら炉の“出前授業”へ発展も

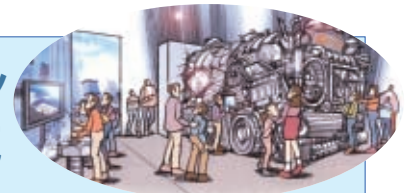
約5時間後、大勢の地域の子どもたちが興味津々で見守る中、「ケラ」という真っ赤な鉄塊が取り出された。この光景に小学6年生の大黒ゆりこさんと瀬尾香奈奈さん

は「私たちが使う鉄製品の始まりがこの鉄塊からと思うと、鉄づくりって面白い！」と目を輝かせていた。

また、偶然、東京都武蔵野市から夏休みで広畑製鉄所近くの母親の実家に滞在中、祖父に連れられて見学した小学4年生の山本悠貴君は「夏休みの自由研究の題材としたい」と終始、熱心にたたら製鉄を見守り、メモしていた。

初めての広畑でのたたら製鉄実演は、地元のマスコミも注目し、各紙の地方版に大きく掲載された。これは、さらに「次世代の人材育成」にかねて課題意識のあった兵庫県の関係機関でも共感を呼び、「ぜひ、子供たちがたたら製鉄を体験できる出前授業を行ってほしい」との要請につながった。その要請に積極的に応え、現在、両者で来期の教育プログラムが検討されている。小さな「たたら炉」は、今、大きな夢への出発点に立った。

12月1日科学技術館 鉄鋼展示室 リニューアルオープン 完成記念式典に引き続き、「講演会」と「たたら」を実施



日本鉄鋼連盟が「鉄鋼業の社会的認知度向上策」における「ものづくり教育」の中核事業として、(財)日本科学技術振興財団科学技術館の協力を得て検討・実施してきた科学技術館(東京・北の丸公園)鉄鋼展示室改装が12月1日「鉄の記念日」に完成しスタートする。

今回の改装では、科学技術館を訪れる年間約60万人の見学者の過半を占める小学校高学年の児童を主な対象として、素材としての鉄の面白さ、ものづくりの楽しさなどを知ってもらい、彼らの探究心を呼び起こし、日本の鉄鋼業ならびに製造業を担う次々世代の人材育成の場とすることを意図した。

展示では、「鉄の基本」から「未来」までを一貫したストーリーとイメージで見せることとし、さらに鉄の実験・工作のワークショップを常設することで、体験しながら理解を深め、興味を持ってもらうこととした。

このワークショップの運営のため、公募した「実験の先生」「鉄鋼ボランティア」には当社OB・社員ほか積極的な応募があり、「実験の先生」2名と「鉄鋼ボランティア」5名が内定した。

科学技術館と日本鉄鋼連盟では2006年12月1日(金)の完成記念式典に引き続き、12月2日(土)10時(予定)から国選定保存技術保持者玉鋼製造(たたら吹き)国無形文化

財の村下、木原明氏と東京工業大学教授の永田和宏氏の講演、12月3日(日)8時30分(予定)からは「たたら製鉄」を行う。

「たたら製鉄」参加者は科学技術館SCIENCE友の会会員から募集しますが、見学はできますのでぜひご参加ください。



お問い合わせ先：科学技術館事業部
〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園2-1 TEL 03-3212-8544